HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	キルギス共和国の日本語学習者の留学経験と進路選択
Author(s)	入山, 美保
Citation	日本中央アジア学会報, 18, 52-53
Issue Date	2022-07-31
DOI	10.14943/jacas.18.52
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91614
Type	article
File Information	JB18_009iriyama.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

キルギス共和国の日本語学習者の留学経験と進路選択

入山　美保

本発表は、キルギス共和国（以下、キルギス）の日本語学習者の日本留学経験はその後の進路選択にどのような影響を与えたのか、インタビュー調査を行い、その結果から、キルギスで求められる日本語教育とは何か、留学制度を考察する一助とするものである。

2020年を目途に30万人の留学生受入れを目指す「留学生30万人計画」が2008年に日本政府により策定され、2019年に数値目標が達成された。「留学生30万人計画」とは、日本を世界により開かれた国とし、アジア、世界の間のヒト・モノ・カネ、情報の流れを拡大する「グローバル戦略」を展開する一環として計画されたものである［文部科学省他2008］。受け入れ国側の日本政府は、入口から出口まで一貫した取組により優秀な外国人留学生を戦略的に獲得し、少子高齢化に対応するべく、高度な日本語や日本文化に関する知識を有する外国人人材の育成及び日本と母国との相互理解の増進や友好関係の深化に貢献しうる人材を育成することを目指している。一方、送り出し国側では、文部科学省研究留学生として派遣された者が母国に貢献できる知識や技術を身につけても、日本で就職するといった頭脳流出、人材育成奨学計画（JDS）で留学後、母国に帰国しても、留学前にいた職場で活用されず、別の企業に転職するといった問題が起きている。受け入れ国側と送り出し国側の双方にとって利益のある頭脳循環の体制を構築する必要がある。

キルギスは、「H30対日世論調査国別集計表（中央アジア）」［外務省 2019］によると、世帯月収25,000KGS（約360US$）以下が54%を占め、私費で日本留学するのは難しい。日本に研究留学している者のほとんどは、文部科学省研究留学かJDSで留学している。そこで、日本留学経験がその後の進路選択にどのような影響を与えたのかを調べるために、留学後、キルギスに帰国した調査協力者Aに2017年3月、2018年3月に「日本語学習動機」「日本留学の目的」「日本留学経験が現在にいかされているのか」等（若林［2016］を参考）、半構造化インタビューを実施した。Aは、30代（当時）女性で大学教員をしながら、日本語学習機関で4年間、日本語を学び、約2年間の日本関連機関で勤務後、文部科学省研究留学生として6年間、留学した。研究テーマは、自殺予防であった。Aが日本留学を志した理由は、身近な者の自

殺が 2 件あり、勤務先で身の周りに自殺した人がいるか聞いた際、ほぼ全員が親戚、近所の人、同級生が自殺したと回答し、自殺者が多いということがわかったからであった。また、日本は自殺者が多い国ということが知られていて、研究が盛んだと思い、留学を志したとのことであった。キルギスでは自殺に関する研究をしている者はおらず、A が初の研究者であった。A は、博士の学位取得後、キルギスに帰国し、チャリティ活動を行っている。チャリティ活動は、ボランティアであるため、フリーランスの業務で生計を立てていたが、帰国から 1 年半後にキルギス国内の日系企業に就職した。A はキルギスの自殺者を減らしたいという気持ちから、留学を志したので、博士の学位取得後は、キルギスに帰国することを留学前から考えていた。しかし、帰国後、周りに「なぜ、帰国したのか。なぜ、キルギスのような給料の低い国で働くのか」と聞かれることが多いとのことだった。A は日本の給料が高いことを知っているが、キルギスでやりたいことが多いので、帰国したことは後悔していない。A はキルギスの若者が日本に留学するのは、日本で就職するための手段を得るためであって、留学後、母国に貢献しようと思って、帰国を考えているキルギス人に会ったことがないこと、研究留学をしても、奨学金給付期間に博士の学位を取得する人は少ないということを語っていた。

A へのインタビュー調査から、母国に貢献したい、母国を変えたい、良くしたいといった目的意識が高い留学経験者は帰国する傾向が高いということがわかった。しかし、その一方で、留学で学んだことをいかした進路を歩みたいが、それだと生活できないので、理想と現実の狭間で苦しんでいる留学経験者もいることがわかった。研究留学をしても、博士の学位を取得する人が少ないということから、研究のために留学するのではなく、日本に行きたいから留学するといった、研究目的が具体化していない者が多いこと、高度な日本語力不足も問題として挙げられる。キルギスの頭脳流出から頭脳循環への転換にはどのような方策があるのか、博士論文執筆のために具体的な研究課題を挙げ、それに取り組める力や日本語力を身につけるためにはどのような教育が必要か、さらに検討する必要がある。日本国内にいるキルギス出身の留学経験者に対してもインタビュー調査を行い、考察するのが今後の課題である。

参考文献

文部科学省他 2008「留学生 30万人計画の骨子の策定について」https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1420758.htm, 閲覧日 : 2022年 3月 13日。

外務省 2019「H30対日世論調査国別集計表（中央アジア）」https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000480993.pdf, 閲覧日 : 2022年 3月 13日。

若林親正 2016「ASEAN 元国費留学生から見た日本留学」https://www.huffingtonpost.jp/chikamasa-wakabayashi/overseas-education-japan_b_12765810.html, 閲覧日 : 2016年 11月 16日。

（筑波大学人文社会系）